

——詰将棋と小説研究 大好きなものを追いかけて

名作「ロリータ」を含む多くの翻訳を行い自らも著作を多数発表、さらに詰将棋作家としても活躍。今回は、そんな若島教授にお話を伺った。
(猫ろ餅)

——教授の研究分野について説明をお願いします

私の専門分野は一応、英米文学です。しかし私としては英米文学に限定するつもりはありません。ロシア文学もフランス文学も、もちろん日本文学だって好きです。さらに言うと、ジャンルも限定したくない。主流文学はもちろん好きだし、推理小説やSFなんかもよく読みます。要は小説だったら何でも好きなんです。もしも「小説論」なんていう研究があればそれにあたるんでしょうけど、今のところそういう呼び方をしている人はあまり見当たらない。私が先駆けになれば面白いですね。

——具体的には誰の作品を専門にしているのでしょうか？

専門の話をする、ウラジーミル・ナボコフという作家の作品を研究しています。ナボコフはロシア出身で、父親が政治家という裕福な家庭の生まれ。幼いころからフランス語と英語も学び、母国語のように扱えたと聞きます。初期はロシア語で執筆していましたが、1940年アメリカに拠点を移した後は英語で執筆し続けていました。ナボコフの文章は英語の文章の中で最も美しい文章だ、とまで言う人もいます。まあ私はそうとまでは思いません。むしろ悪文に近いとすら思ってます(笑)。

——悪文ですか。それはまたなぜでしょうか？

まあ言い換えれば独特の魅力なんですけど。文章が長いし、ナボコフを読み始めた当時、私は小説というのは物語が面白くてなんぼだと思っていました。で、ナボコフは物語がものすごく面白いというわけではないんですね。どちらかといえば、細かい描写で魅せるタイプですね。描写の難しい言い回しでつかかったし、しかも読めたところであまり物語が面白くなかったわけですから、当時はなんなんだこれと思った。何度も挫折しましたね。

——そんなナボコフを専門になさったのはどうしてでしょうか？

ある時なぜか突然すんなりと彼の魅力を理解できるようになったんですね。それから一気にナボコフに傾倒したんです。恐らく、彼が自分と相性の良い作家だったんだと思います。というのも作家にはいろいろなタイプがあって、たとえば登場人物を作ったら、その人物が勝手に物語を進めていってしまうという作家もいる。ナボコフは何か書きたいテーマが先に存在していて、それを表現するのに適切な人物や背景を選び、言葉で組み立てていくような小説の書き方を作家なんです。そういう書き方が、私のものの考え方に非常に近かったのだと思います。

(葉・2 薄幸の民)
(嘘だけ；編)

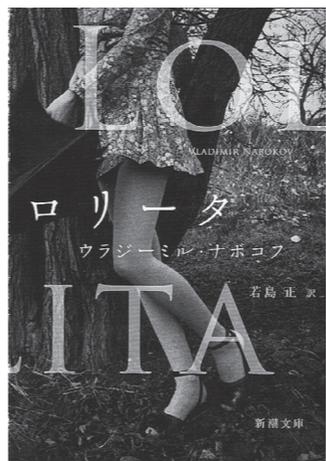
——教授のものの考え方という？

アイデアを表現するために細部を組み立てる。こういう考え方は、詰将棋の作品を作るときに考え方と通ずるものがあると思うんです。これは実はナボコフを読もうと思った動機でもあるんですが、ナボコフも詰チェスを作るのが趣味の一つだった。私は中学生のころから詰将棋を作るのが趣味でしたから、それで共通点があるかと。

——詰将棋の創作についてもう少し詳しくお聞かせください

詰将棋というのは、将棋の規則の下で、有限個のマス目の盤上で、有限個の駒を並べて作られる問題なわけです。ですから問題の種類はただか有限個なわけですよ、もちろん。問題はもともと盤上に存在しているものだともいえる。ですから私の感覚としては、詰将棋を「創作する」というよりは「発見する」という感覚です。だから私が詰将棋を作る際、まず何か実戦では起こりえないようなアイデアを妄想する、そしてそれを表現するためにはこの駒をこのマスに配置して……というふうに組み立てていくんです。こういう作り方をしているからだと思うんだけど、詰将棋を解いていても、作者が誰なのかわかる。問題のクセというか、作意が見抜けるんですよ。自分でも不思議なんですけど。

Books



『ロリータ』ナボコフ著



『乱視読者のSF講義』



『盤上のファンタジア』

はみだし
すてーじ

このはみだしは、以下のスポンサーの提供でお送りしました
⇒そりゃあもちろん、読者のみなさまのご支援あってこそです！

Profile

1952年 8月10日京都に生まれる
1968年 洛星高校を卒業、京都大学理学部に入學
1972年 京都大学理学部数学専攻課程卒業
1974年 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
1984年 神戸大学に赴任
1987年 京都大学に赴任
1996年 現職に至る

詰将棋の二大賞である、看寿賞、塚田賞を幾度も受賞。チェスプロブレム解答者としては世界ランキング8位にまでなった。

——創作ではなく発見というあたり数学を連想させるのですが……

そうなんです、何かと理論派なのかもしれませんね。高校までは数学オタクでしたし。理学部に入ったのも、数学者になりたかったからなんです。そして実は、英語は大の苦手だった。入試では英語をどうごまかすかが一番の課題でしたね。

——それがどうして英文科に転向したんでしょうか

まあ経緯はいろいろとあるのですが、きっかけは1回生の時に、授業で扱われていた作品を読んでみようと思ったことです。その洋書が、なんかか読めた。黒人英語で書かれたもので、高校までの英語とは随分違ったからですかね。それで「英語というのは話す人の数だけあるんだ！」と気づいた。それから英語を読むことの楽しさに開眼して、あさるように洋書を読むようになりましたね。

——小説・詰将棋の魅力とは？

作者によって異なるんですよ、詰将棋も小説も。たとえ同じものを表現しようとしても、必ず作者のクセのようなものが浮かび上がってきて、それを独特のものとしてしまう。この不思議な感覚が、詰将棋や小説の醍醐味なんじゃないかなと思っています。

——京大在学当時の思い出をお聞かせください

えーと、ほとんど講義には出ていません(笑)。将棋部に入って、将棋部を卒業したと言っても過言ではありません。主に将棋と洋書、それと映画で私の学生生活は埋まっていた。学生時代ちゃんと勉強していやよかったんじゃ……とたまに思ったりもするけど、あの膨大な時間に大量の洋書を読みあさったからこそ今の私があるわけ。だからあれはあれでよかったと思っていますよ。

——京大生に一言お願いします

最近の京大はまじめになっていく傾向だし、私の時のようには遊べないのかもしれない(笑)。全国的な傾向だから仕方ないことかもしれないけど、だからこそ京大だけその傾向から外れていく方が面白いんじゃないかな。京大は京大らしくあってほしい、4年間ゆるゆると過ごしてもいいんじゃないの、と個人的には思います。ただ、今は就活なんかで社会そのものが大学生をゆっくりさせてくれない。そこはしっかり認識して、自分のやりたいことを見定めておくといいかもかもしれません。

——ありがとうございました

(工・1 相橋系)
(にっこり！；編)

はみだし
すてーじ

らいふすてーじの中身がはみだしすてーじだけになる日も近い
⇒そうなんです、来年度にはそうなっていると思いますよ。